

SEMINAR HOUSE NEWS

セミナー・ハウス'89春

=第11回大学合同セミナー=

●平和・開発・日本の国際化

=第146回大学共同セミナー=

●ユングとフロイト

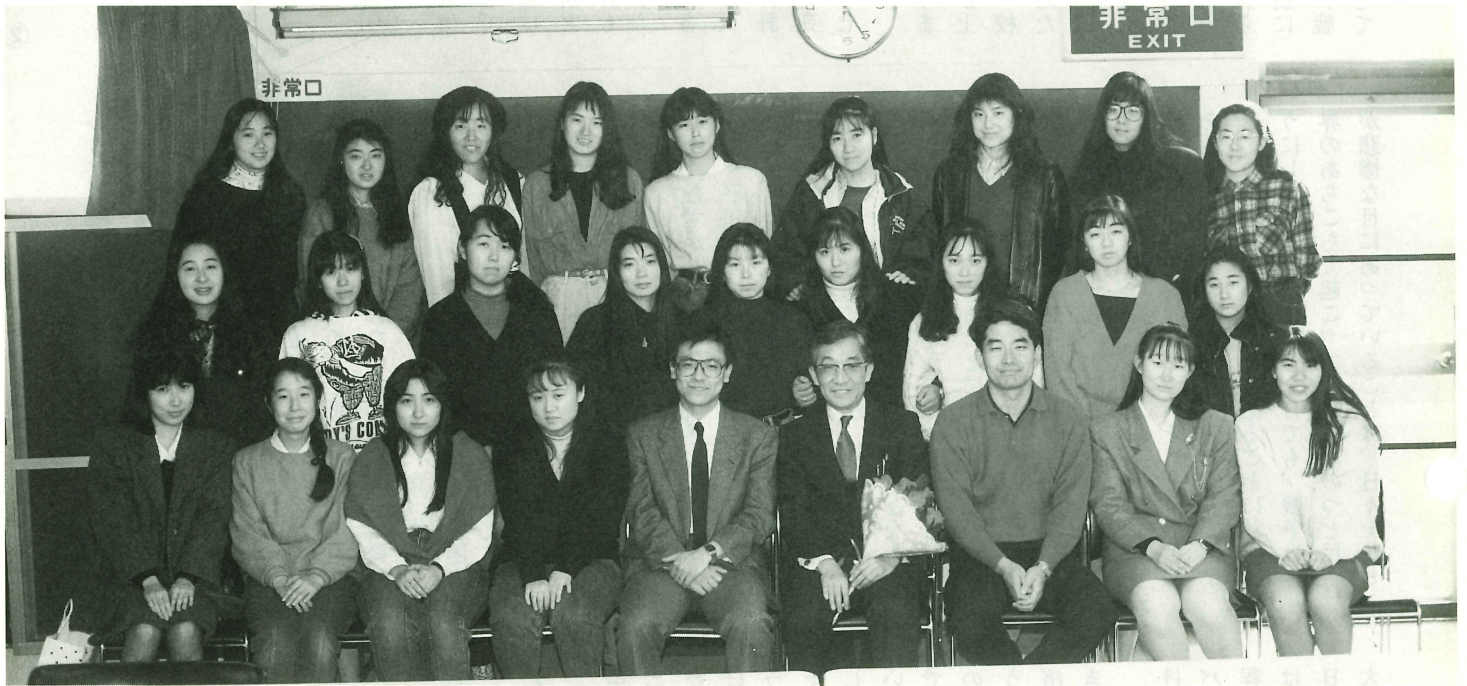
●私の大学生活とセミナー・ハウス

——卒業に際して一言——

●大学セミナー・ハウスの自然環境

——その植生と保全のための提案——

●業務通信——冬季3ヵ月の合宿交流から——



Plain living and high thinking

No.114

平和・開発・日本の国際化

中央大学法学部教授 高柳 先男

「戦争はごめんだ」という
ささやかな原体験

私は空襲と飢餓感の体験をもつ最後の世代の一人です。生まれ育った愛知県豊橋市は、昭和二〇年六月一九日に空襲を受けました。私が小学二年生の時のことです。今でも鮮明に当時のことを記憶していますが、夜半一時ごろ何機ものB29の巨大な影が頭上を飛びぬけ、雨あられのごとくに焼夷弾を落としていきました。その夜、逃げまどう人々が町はパニック状態に陥りました。私は避難場所として決められていた城跡に一人で必死のおももちで逃げたわけです。五時間ほどがたち、空が白み始めたころ、人々は町に帰っていきました。私も戻ってみると、驚いたことに人口一五万人ほどのこの都市は文字通り焼け野原と化し、道端には黒こげに焼けただれた死者の姿が目に見えました。まさに地獄図でした。

三日後、私たちは小学校の校庭に集まりました。すると米軍の艦載機が校庭のはるか上空に見えたと思う間もなく近づいてきて、校庭にいる子供たちめがけて機銃掃射を始めたのです。逃げ場を失って、私たちは本能的に地面に伏したのですが、バリバリとすさまじい音とともに砂煙が舞いあがっていくのを眼前にして、形容できないほどの恐ろしさに身をふるわせていたのを思い出します。これらは比すべくもありませんが、それでも私に戦争はごめんだという思いをもちつけさせて

いる原体験となったのは事実です。

そればかりではありません。子供ごろにわすれがたく刻印されているのは、敗戦後、一年半ぐらいいも食べ物がなくてひもじい思いをしていたことです。いもの茎やすいとんの日々。当時どの家庭でも、子供はいつもおなかを空かしていたのだと思います。学校に弁当を持ってこられない子供たちが、戦後二年ほどたつてもまだいたのです。食べ物のうらみは恐ろしいといいますが、当時の貧困と飢餓感私の後遺症となり、大学の食堂で大抵の学生が食べ物を残すのを、もったいないという思いでいつも見ているのです。

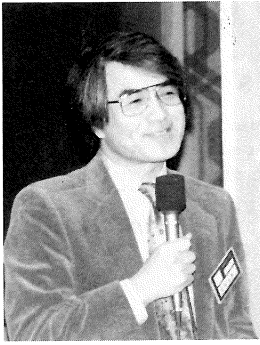
なぜ、今、私がこのような話をするのかというと、若い学生に平和について語ることがいかにむずかしいかを日頃痛感しているからです。平和とは、ちょうど健康を失って初めてその大切さを知るようなもので、失われてみなければ平和の大切さはわからない。戦争は昔から詩歌にうたわれ、文学や絵画に表現され、人間の情動の激しい源泉となってきましたが、平和はそうではありません。作家たちが戦争を語るることによってしか平和の大切さを表現できない以上、今日のように飽食のなかで戦争を知らない世代が過半数をしめる時代には、平和の大切さがうまく伝達できないのは仕方がないかもしれないのですが、逆に、身近なところで、それぞれの体験を語る以外にないとも感じているものですから、なにはともあれ、ことあるごとに話すようにしているわけです。今日でも、戦争は世界のあちこちで起こっており、そのつど民衆が悲惨な目にあっていることは、日々テレビ

で目のあたりにしているところでしょう。そこから何を讀み取るかは想像力の問題であって、想像力が衰退していること自体に、問題があるのかもしれない。日本人の平和ボケといわれるわけです。

暴力としての開発

さて、私は一〇年ほどまえからゼミの学生たちと二年に一回の割合で東南アジアを訪れています。タイにはこれまで五回ほど足を運んでいます。この間のバンコックの変貌ぶりには驚くばかりです。高層ビルが林立し、建設中だったハイウエーは完成し、トヨタやニッサンを駆るタイ人の姿が目立つようになっています。街路を往来する人々の身なりは数段よくなっているし、サイアム・スクウェアというレストラン、映画館、スーパーマーケット、本屋、電化製品の店等々が密集している、ちよつとしゃれた新開地のにぎわいはこの国の「近代化」の一面といつてよいでしょう。要するに、バンコックは「近代化」のゆえに「豊かになった」かのようです。そういうえば、あれこれ問題はあっても、タイ経済がめざましく成長している事実は、否定できない現実です。

とはいえ、開発政策の追求が単純によいわけでもありません。たとえば、スラムです。バンコックはもともと五〇万人くらいを養う程度の都市でしたが、この二〇数年間に人口は五〇〇万人に膨れ上がっています。それは、日本やアメリカなどの外国資本と消費財が大規模に流れ込むことによって現出した都市



化であって、実際には雇用の機会、豊かな消費生活などないのに、それがあるかのような幻想をふりまくことによって、開発にとり残された貧困の農村の膨大な人口を吸い込んだものなのです。その結果は、農村の荒廃と都市のスラム化というわけです。バンコックのスラムには、約一〇〇万人もの人々が住んでいるといわれております。

日本人の観光コースの一つになっているクロントイは、人口五万人のスラムの一つですが、もともと赤裸々に開発と貧困がセットになって現れている所です。私はこのスラムを訪れるたびに、日本の、あの戦争の二、三年間のことを思い出します。日本が敗戦で焼け野原となり、飢餓状態で出発した時には、どの都市にもスラムがありました。戦後の日本のスラムは戦争が生み出したものですが、バンコックのそれは貧困が原因であり、その貧困は開発政策によって作り出されるのです。開発という言葉にこめられるものが何であれ、開発によって貧困が拡大再生産されるといふ逆説的な現実の前には、戦争がないから平和であるという捉え方をむなしものにはさせません。まさしく暴力としての開発です。アジア、アフリカ、ラテン・アメリカの都市ではスラムが日常化し、戦争がなくても平和ならざる状態が、そこには典型的な形で存在しているわけです。もちろん大都市スラムだけでなく、こうしたことは世界のいたるところにみられることなのです。

ヨーロッパ中世史家で社会哲学者であるイヴァン・イリイチは、民衆が自分たちに特有の文化を維持していくのに必要最低限の物質

的・精神的基盤という意味でのサブシステンスが外的な力によって奪われなことが平和であると表現しております。私は、戦争がないから平和であるという通念をつき破ったイリイチの考え方に感銘を受けたのですが、東南アジアのスラムを見るたびに一層、その思いを強くしたのです。

「経済大国」日本の国際化

第二次大戦後に生じた武力紛争は、主なものだけでも一五〇件にのぼるといわれます。二千万人もの死者がでていそうです。

たしかに戦後、世界を巻き込む大戦争は勃発しておりません。ひとは「核による平和」と呼び、米ソ核抑止体制を正当視する理由にします。実は、現代の戦争は、核による米ソの平和のもとで、ほとんどが開発途上国、第三世界で発生しているのです。米ソの代理戦争がおこなわれてきたのだと解釈すべきなのでしょう。朝鮮、ヴェトナム、アフガニスタンにおいては米ソ自身が直接戦争の当事者ですらあったわけです。そののみ英仏中など大国がこうした紛争に介入しています。第三世界に近代世界史の矛盾のすべてが集中してしまっているといっても過言ではありません。

戦後日本はひたすら通商国家に徹し、戦争がないという意味での平和を享受してきましたが、考えてみれば、それは非常に偶然的な要素によるものです。軍事化を志向してこなかったのは、日本人自身の敗戦の経験が大きく働いて、平和を大切にしようという感情を持ってきたからかもしれません。しかし、こ

のことも近年のわが国の急速な軍事化によって、とてもあやしくなっております。世界がデータントに向っていくのに逆行するかのようです。私たちに軍事化に抵抗する精神の緊張感がないから、こんな逆行を許すことになるのです。この事態にアジアの隣人が危惧していることはよく指摘されます。さらに、経済大国となる過程で、日本がいかに開発途上国の平和ならざる状態に深く関わってきたかという点もほとんど自覚されていません。日本の経済的進出が開発途上国の適正開発を妨げ、貧困、社会的抑圧、人権無視といった構造的暴力を生み出す体制を支援することに深く関わってきたということは、やはり認めません。ODA世界一といっても、それほど喜ばれてばかりいるわけではないのです。

日本の国際化という課題は、これらの現実と切り離して考えることはできません。平和ボケ、経済大国ボケしている日本人には、こうした世界の現実がみえなくなっています。異なった価値観をもつ隣人と共に生きるという感覚が希薄だからでもあります。日本人の顔はいつも欧米に向けていて、自分と同じような顔をしたアジア人は意識から消え去られております。今、世界から厳しく問われているのは、日本人のこうした態度に他なりません。

(文責・編集者)

第11回 大学合同 セミナー

平和・開発・日本の国際化

＝主題＝

▼基調講義

中央大学法学部教授

高柳先男氏

▼セクション演習

A 軍事化と開発―公正な世界秩序の模索―

独協大学法学部教授

臼井久和氏

B 世界経済の変容と日本の国際化

中央大学法学部教授

滝田賢治氏

C 日本における〈和〉とは何か。それは〈平和〉と同じなのか、ちがうのか。

立教大学法学部講師

戸田三三冬氏

D アジア太平洋地域の国際関係―開発

滝田賢治氏

▼参加86名(内女子26名)

中央(43)、独協(24)、立教(18)、東海(1)、以上4校(6ゼミ)

◇

いま、平和問題を考えるときに、核戦争への危機意識だけにとどまっていると、戦後一五〇件もの戦争が生じし、二千万人を超える死者をだしている世界の現実を見過ごすことになりかねない。しかも大切なことは、これらの戦争のほとんどが第三世界で発生していることであ

期	日
'88.11.25	～27

援助と国際協力―
独協大学外国語学部助教

竹田いさみ氏

E 社会主義世界の改革と平和の展望

―ソ連・東欧諸国の改革を中心に―

立教大学法学部講師

川原 彰氏

F 平和像の再構成、南北関係の諸相、

日本の役割

中央大学法学部教授

高柳先男氏

▼運営委員

高柳先男氏

る。それらは、基本的には植民地支配の遺産である貧困と社会的抑圧が原因となっておりといつてよい。だからこそ、第三世界の経済開発と社会発展が国際社会の緊急の課題なのである。経済大国となったわが国は、アジアの現実と未来のあり方に深い関わりを持っている。このような文脈の中で、平和・開発そして日本の国際化について考えてみようとするのが、今回のセミナーの主旨であった。セミナーは国際政治学を専攻する中

④

央、立教、独協の3大学6ゼミから八六名の参加者を得て開催された。企画・運営にご尽力いただいた高柳、滝田両氏はじめ、演習指導の臼井、戸田、竹田、川原の四氏のご協力に對して、ここに改めて感謝の意を表したい。

当ハウスの教育プログラムの中心をなす大学共同セミナーの場合には、参加学生は所属する大学、ゼミ、学部などを離れて、テーマに関心を持つ一人の学生としてセミナー・ハウスに集うが、この大学合同セミナーの場合には、ゼミの一員として参加する。もちろん開催中には、そうした帰属意識は二次的なものとなり、一参加者として議論するわけだが、しかし日常のゼミ活動で培った接近の仕方や学習の成果がおのずとためられることになる。

◇
セミナーのプログラムは、高柳氏の基調講義(別掲)に続いて、セクション演習を担当する講師の次のような発言から始められた。

▼「開発」は、第三世界の人々にとつては「暴力」である。世界では一〇億の人々が住む家もなく、飢えに苦しんでいる。日本の開発援助は大きな病院やオペラハウスを建てたりするが、こういう人々のサブスタンスの掘り起こしには役立つでない悪い援助だと言われている。よい援助とは何かを考えてみたい。一方、いま最も進んでいる国際化は軍事的ネットワークである。日本の国際化に

とつて大事なことは、いかに軍事的ネットワークを壊し、文化的なネットワークを進めるかということだろう(臼井氏)▼「飽食国家」の中で平和や開発を議論するということはどういうことか。その資格が問われるところだが、豊かであるということは余裕があるということなのだから、高見にたった全体的な視点からの議論ができるはずだ。ただし、単に頭の中で考えるだけではだめで、書を捨て街に出ることも必要ではないか。

「皮膚感覚」で理解したことを議論や書物を通して自分の頭の中で一つの全体像に組み立ててほしい(滝田氏)▼「これまでの国際政治では、普通の人々の暮らしではなく、権力とか政府が主要なテーマであるかのように論じられてきた。しかし、こうしたパワーポリティクスとは反対の極に反権力のアナキズムが生まれている。もちろん民衆の中からも権力志向が出てくるが、かれらは自分自身がいかにか権力志向にならないで、個としての「自治」とその連合としての集団を作っていくのかということを考える。近代国家のただ中から生まれた一つのアンチ・テーゼだった。この流れは底流のようにはつきりと見えないまま現代まで続いている。そこには人間が生きていることを減はさないような一つの思想がある(戸田氏)▼「ゴルバチョフのペレストロイカは、単にソ連国内の経済危機の問題から出てきたわけではない。日本には情報が入ってこないのに、何か突然起こったか



各セクションの問題提起

—左から白井、滝田、川原、戸田、高柳の諸氏

の印象を受けるが、実は七〇年代後半のソ連、東欧諸国、特にポーランドの「連帯」に象徴されるような国家に対抗する下からの民主化という社会レベルでの静かな変化の上で起きている。データや軍縮といえば、東側でも広範に受け入れられているかのようだが、抑圧体制を強化する形に働いてしまうこともあり、市民運動を進めている人たちは必ずしも歓迎されていない。現在のペレストロイカも上からの危機管理型の改革であり、体制維持ということでは一定の評価がなされているが、百パーセント完全に受け入れられているわけではない。社会主義世界の改革の問題も、単に東側だけの問題としてではなく、比較政治の視点から我々自身の平和の問題とし

て考えたい」(川原氏)。

◇

今回のセミナーは、プログラムの大半がセクション演習にあてられたこともあり、討論の模様を報告することは困難である。そこでここでは、テーマにかかわるさまざまな議論を要約することではなく、参加者がこの大学間交流の経験をどのように受けとめたのか、また今後更にごうした交流の場を確保し、拡大していくためには、どのような点を改善していく必要があるのか、といった点についての参加者の声をアンケートから拾って、報告に代えたい。

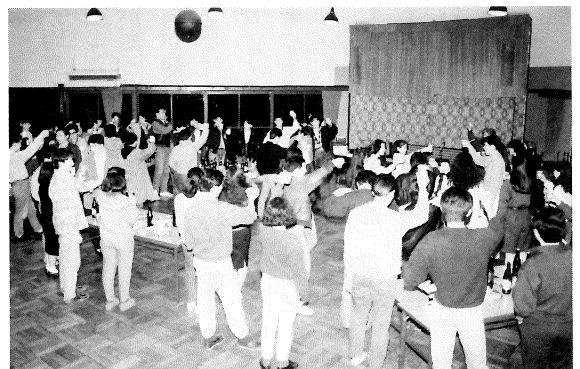
それではまず、参加学生のセミナー全体に関する感想を紹介しよう。学生たちは各大学のゼミ活動の延長として参加するわけだが、セミナー期間中は所属の大学、ゼミを超えて、一人ひとりの問題関心にそって指導教授とセクションを選択することになる。従ってセミナーの中では、ゼミへの帰属意識を持ちつつ他の大学の学生たちと議論をする。

「同じテーマについて、自分とは別の視点を持った人がいるし、ゼミによってアプローチの仕方も異なる。そのような人と意見を交わすことは新鮮であり、大いに啓発された」、「他の大学の学生たちと勉強するのは初めての経験だったが、一人ひとりが違った考え方、感じ方、経験を持ち、それを活発に発言しあうことができたので、大変刺激になった」、「活発に意見が出て、自分と同年代の人たち

の問題意識がわかった。今後自分が考えていく方向づけや一つのヒントを与えてくれた」など、異口同音に他大学の学生との討論の場を積極的に評価する声が寄せられている。

しかし他方、セクション演習を中心に配したプログラムに対して「交流がセクション内の学生に限られてしまった。できればグループを開放していろいろなセクションに参加できればおもしろいのではないか」など、セクションを越えた交流の必要性を求める声も聞かれた。また、セクションによって多少の違いがみられるので一概にはいえないが、セクション演習の運営の方法について、講義形式での進め方に対する不満が一部のセクションから出され、討論を中心とした運営を望む声が強くなるのがわかる。

こうした大学間交流の場をより有効なものにしていくための提案も寄せられている。日常の大学のゼミでは、基礎概念に対する多少の食い違いがあっても回数を重ねることに修正しながら議論していけばよいが、短期間で行なわれるこの種のセミナーでは、前提をめぐる議論に時間を費やすことは能率的ではない。またこうした大学間交流の場を単なる出会いの場とするのではなく、専門性の高い研究討論の場とするためには、「学生たちだけで事前に集まってサブゼミをしたり、何か共通のテキストを出して論点を絞り込む」などの準備が必要ではないかとの反省の声があったことを明記しておく



2日日夜の交流ゼミ——演習を終えてビールで交歓

たい。

◇

いずれにしても参加学生にとっては、休憩時間や自由時間が短く、慌ただしい三日間だったかもしれないが、「恵まれた自然環境と人的環境の中で、勉強する機会をもちえたことは貴重な体験だった」にちがいない。こうした試みが閉鎖的な日本の大学社会の中で芽をふき、それがしだいに成長し、少しでも大学間の壁が低くなり、開かれた大学社会になっていくことを期待したい。

第146回
大学共同
セミナー

— 主題 —
ユングとフロイト

期	日
'88.12.9	~11

▼ゲスト講演

フロイトとその弟子たち

広島大学教育学部教授 鎌 幹八郎氏

▼セクション演習

A ユングとフロイト—ナルシズムを

中心にして—

横浜市立大学文学部教授

安田一郎氏

B ユングとフロイト—おとぎ話の分

析をめぐって—

駿河台大学法学部専任講師

鈴木 晶氏

— 主題 —

C ユングとフロイトの宗教観

青森大学社会学部助教授 入江良平氏

D ユングとフロイトの歴史性—人間と

思想の関わり—

花園大学文学部助教授 村本詔司氏

E ユングとフロイト—夢分析を中心に

して—

横浜国立大学教育学部教授

小川捷之氏

▼運営委員

小川捷之氏

▼参加者86名(内女子47名)

早稲田(10)、横浜国立(9)、津田塾(8)、

東京(6)、立教(5)、筑波・青山学院・

武蔵(各4)、お茶の水女子・慶応義塾・

国際基督教・中央(各3)、東京医科歯

科・玉川・明治学院(各2)、東京外国

語・東京学芸・一橋・上智・駿河台・成

蹊・成城・聖路加看護・東洋・日本女

子・和光・花園(各1)、その他(6)

以上27校



心の中に潜む無意識の深みから人間を

理解する方法は、現代においては、さま

が、精神分析学にとってこの40年は非常

に大きな意味を持っているという。とい

うのも、最近フロイトとユングの極めて

パーソナルな事柄を明らかにする資料が

次々に公表され、精神分析学の草創期の

姿が次第に浮き彫りにされてきたからで

ある。

これまで精神分析学の起源について

は、フロイトの関係者によって厳しい「検

閲」が施されてきた結果、理論の形成過

程や理論と実際の治療とのずれなどは一

切証明されることがなかった。しかし、

近年新しい資料が続々と発掘されるよう

になり、その中には従来のユングやフロ

イトに関する見方を根底から覆すような

事実も明らかにされてきた。それに伴っ

て、現在の精神分析学界の先端的な関心

事の一つは、精神分析学運動におけるさ

まざまな「人間たちの織りなす影」を読

み取ることにあるという。

「フロイトとユングの出会い、彼ら

のその後の発展に何をもちがらしたのか」、

「フロイトから自分の後継者とまで言わ

れる関係にあったユングは、なぜ彼と訣

別しなければならなかったのか」、「そも

そも精神分析学という新しい学問の創造

はどのようにしてもたらされたのだろうか

か」。広大で深遠な無意識の世界に光を

当てたユングとフロイトの学問的形成的

基盤には、「人間と人間のすさまじい出

会いとぶつかり合い」(小川氏)が隠さ

れていたのである。



日本では、現在ユング心理学が一種の

ブームの観を呈しているが、そのことは

定員を遙かにオーバーする130名ほどの参

加希望者があったことにも示されてい

る。最終的には、セミナーの適正な運営

を図るために参加者が86名に絞られるこ

とになったが、この紙上を借りて、この

ような盛大なセミナーの実現にご尽力い

ただいた運営委員の小川氏を初めとする

各講師に対し、改めて深く感謝の意を表

しておきたい。

初日の共通セッション(講義IとII)

では、小川・鈴木両氏が、ユングとフロ

イトの生涯を時系列的に追いながら、彼

らの人生での出来事と思想形成がどのよ

うに関わり合っているかについて概略を

提示した。小川氏は、両者の人間像を浮

き彫りにしつつ、精神分析学の歴史から

は、「心の問題については、女性の患者

から男性の治療者があるヒントやインス

プレーションを得て、それを男性の学者

がまとめて一つの理論を作り上げる」傾

向が観察されると指摘した。また、それ

を受けて鈴木氏からは、特にユングとフ

ロイトの理論形成において、ユングの患

者であったザビーナ・シュピールライン

という一女性がかなり大きな役割を果た

したことが紹介され、「精神分析学のさ

まざまな理論の背後には女性が存在して

いる」という興味深い事実が明らかにさ

れた。

セミナーの導入部として、豊富なスラ

イドやマンガを用いながら視覚的に構成

された講義は、ユングとフロイトについてのイメージを膨らませることになり、参加者から好評を博した。

◇ 初日の夜と二日目の午前中行われた二回に亘るセクシオン演習の後、午後からは鍾氏によるゲスト講義があった。

「フロイトとその弟子たち」と題された話の中で、氏は、精神分析学の歴史が「理論を構築する人間とそれを揺るがす人間との激しい戦い」の歴史であったことを紹介し、精神分析の持っている人間の側面を鮮明に描き出した。

フロイトは言わば精神分析という宗教の教祖のような存在であったが、その重要な弟子たちがほとんど亡くなった今、教祖の「脱神話化」が急速に進んできているという。フロイトの諸理論の概略とそ



左から鈴木、安田、村本、小川、鍾、入江の諸氏

の展開を紹介しながら、氏は、フロイトを解くキーワードは、彼自身の作った「ナルシズム」と「エディプス・コンプレックス」の二つの概念であると指摘し、「フロイトは生涯に亘って、ものすごい誇大自己を持ち続けた人であり、弟子たちは全部エネルギーを吸収され、骨抜きにされてしまっている。フロイトにとって、

学問とは生き死に関わるような問題であり、彼がユングやアドラーといった弟子を何としてでも排除しなければならなかったのも、新しいアイディアに対して、自分の理論を死守しなければならなかったからである。自分が自立するためには、その対立者(父親)を倒さなければならないとするフロイトのエディプス・コンプレックスは、このことを非常に象徴的に表わしている理論である」。実際に、フロイトの弟子の中には自殺者も出ており、彼と弟子たちの関係が、言わば「血生臭い戦い」であったことを示している。参加者からは、「フロイトの生き様に戦慄を覚えた」との感想が寄せられている。

講演を閉じるに当たり、鍾氏はフロイトのエディプス・コンプレックスに対して、むしろ母と子の二者関係を中心とした前エディプス期が問題になっている現在の精神分析学の課題について触れ、特に日本人にとっては、母をめぐる父と子の葛藤を土台としたエディプス論はどうしてもなじむことができず、これが日本に精神分析が本当には根付かない理由で

はないかとの指摘を加えた。氏は、この点に関しては、「母性的なレベルの問題を包括的に取り入れてユング心理学の方がもつとわれわれに近いのではないか」と問題提起を行い、この問題はティ・タイムを挟んで行われたシンポジウムでの議論に引き継がれた。

◇ シンポジウムの前半では、前述したシュピールラインというロシア系ユダヤ人女性が、ユングとフロイトの学問形成に与えた影響(例えば、ユングのアニメーション原理やフロイトのタナトスⅡ死の欲動の概念など)について、入江、村本両氏から最新の資料に基づいた詳細な報告があった。精神分析学の起源に関する学問の最先端を垣間見て戸惑いを感じた者も多かったが、「思想の基本がその人の私生活に存在することに興味を覚えた」、「ユングとフロイトの人間関係がまるで、推理小説を読んでいるようで大変面白かった」などの感想が聞かれ、参加者は大いに知的な刺激を受けることになった。

討論の後半では、鍾氏のゲスト講演を受ける形で、「日本人と精神分析」に関して討論が行われた。特に、鍾氏の「日本で新しいドラマが誕生するのではないか。人種性や民族性が問題となるヨーロッパの文化的風土と異なり、日本ではフロイトとユングに対して精神的に等距離を取ることができる。両者を対等に扱えるため、非常に生産的な議論が可能で

ある。その意味で、日本は世界の精神分析学に大きな貢献をなすことができるのではないか」との指摘は、これからの日本の精神分析学の方向に重要な示唆を与えるものであった。

◇ 「フロイトには人生における神話がたくさんあるが、理論についての神話はあまりない。しかし、ユングには人生についての神話はあまりないが、理論についての神話が非常に多くある(入江氏)と云われるが、今回のセミナーの狙いは、フロイトとユングに関するこうした通念を打破することにあつたと言えよう。

最終日の全体集会后、各セクシオンからの演習報告の後、フロイトとユングの無意識に対するアプローチの違い(前者は否定的、後者は肯定的)、また、ユダヤ教に深く刻印されていたフロイトとグノーシス主義との思想的親近性を色濃く持つユングの宗教観との相違、母性的な性格の強い日本社会の問題などをめぐって、学生を中心に活発な討論が行われた。特に、母性の問題については「日本では、母性の明るい面だけしか認められていないが、母性は光と闇の二重性を持つている。日本社会で起こっている様々な問題を解決する鍵は母性のネガティブな側面を認識することにある」との村本氏の指摘は重要に思われた。

ものを徹底的に考え、デイスカッションすることが人格の形成において極めて大きな意味を持つことは言うまでもない

「ここ来れば

大学生であることを味わえる」

聖路加看護大学看護学科89年3月卒

日野 洋子

八年前に四国の大学を卒業してから二度目の大学生活も大詰めに入った昨秋のこと、「ユングとフロイト、大学共同セミナー」と書かれたポスターが視界に飛び込んできた。卒論の下書きを進めているであろう十二月にセミナーに参加することは、留年につながる恐れがあるのではなかるるか。いや、大学と下宿を往復するだけの毎日では、経験できない何かを得られるはずだ。

「特定の宗教を持たない終末期患者の『宗教的ニーズ』』という卒論のテーマをかかえていた私は、「ユングとフロイトの宗教観」が看板のセクションを選択した。提示された参考文献を斜め読みするのがせいっぱいでセミナーに参加したところ、「君たちはあまりにも勉強不足すぎる。共有できるベースをしっかりと固めてこないと、せっかくの場がもったいない」と厳しいおしかりをいただいた。卒論は別としても、自主的に学ぶことに関して今まで欲がなさすぎたのか、それとも看護大学のカリキュラムの濃密さゆえに余裕がなかったのか、とにかくショックだった。もしかしたら、私は本物の大学

生ではないのかもしれないと思ったほどだ。それでも、「宗教的ニーズ」のキーワードだと思い入れしていた魂や霊についての講師の話聴き、話し合えた三日間は、留年のリスクを吹き飛ばしてくれものがあつた。

大学間の枠がはずされ、顔も知らなかった学生、講師の先生方がひとつのテーマのもとに集い、どういう流れになるのか予期できないスリルと好奇心のうずまく力動的な場、それが大学共同セミナーだ。建物群がひとつの村のように溶け込んでいる丘の美しさは、セミナー村の住人をいつもより素直な人間にしてくれる。「ここ来れば大学生であることを味わえる」こんなコピーのひとつも作りたくなってしまう。

ああ、もつと早くこのセミナーの存在を知っていたら何回でも参加したのにと、学生としては年をとりすぎた我が身を悔やんでもどうしようもない。そこで卒業前の「下級生と語る会」では、セミナー・ハウスの存在をしっかりと宣伝した。女性だけの単科大学に在ることは、それこそ閉鎖社会の穴にはまって、自分の立っているところの確認もあやうくなるのではないだろうか。これからも、多くの学生がセミナー・ハウスと出会うことと、セミナー・ハウスが関東圏以外にも設立されることを願っている。

しかし、今回のセミナーの反省点は、「心の問題」に対して議論がやや抽象的になる傾向が見られた点である。参加者の一人は「人間の心をバラバラに切り刻んでいくと、夢や希望がなくなるようでとても不安である」との感想を述べているが、確かに「人間の心の領域の問題は、本を読んだり、話し合っただけではなかなか分からない」のであり、その意味では「もつと臨床的実践例を入れ込む」（小川氏）ことが課題として残された。

分析して、自らの理論の礎とした。人間の無意識や心の問題を考えるためには、「自分自身の心と向き合っつて、その動きを見つめる」強靱な自己観察の力が必要である。そうしてこそ初めて、自己実現（自分の持っている衝動をしっかりと感知し、それを自分の中に統合すること）が可能となるからである。フロイトとユングによって構築された精神分析の理論は、結局は、われわれの中に潜んでいる「もう一人の自分」を探究するための人間理解の方法に他ならない。今回のセミナーが、参加者にとって「本当の自己を発見する旅」の第一歩となり得たとすれば幸いである。

名実ともに

「開かれている」ことを実感して

筑波大学人文学類89年3月卒

中村 修

私の五年間にわたる大学生活の中で、大学共同セミナーは、非常に印象深い出来事の一つとして位置づけられている。大学での思い出よりも、大学共同セミナーでの思い出の方が、より強烈な印象を私に与えたのではないかとすら思われる。

私が、初めて大学共同セミナーの存在を知ったのは、今は亡き坪井洋文先生が講師となった「日本文化の深層」からであった。その時、私は坪井先生のセクションに参加させていただいたが、そこ

で、私は新鮮な驚きを感じざるを得なかった。というのは、このセミナーが、名実ともに「開かれている」ことを痛感したためであった。

今日、多くの大学において、事情は同様なのであるが、私達は、ともすれば「同好のよしみ」で群れたがる傾向にあるのではないかと思われる。それは学問のみならず、考えられるあらゆる分野においてあてはまるのであろうが、同質の世界に閉じこもるあまり、自らと「異なるもの」との接触を図ることを、私達は往々にして怠っていると言えるだろう。確かに、学問が余りに細分化している現在、このような傾向は更に強化されていくのかも知れない。しかし、そのような中では、真に「開かれた」学問を行う

千人会

'88年12月
'89年2月

◆現在会員一、五〇二名(実会員数)

(通算入会者一、八〇八名)

◆新しく会員となられた方々

B 武蔵工業大学助教 廣田 達衛殿
B 早稲田大学生活協同組合店長 阿部 和夫殿

◆会費ありがとうございました。

石川明、米満澄、池川郁子、青木生子、茅伊登子、大須賀節雄、清水誠、西田亀久夫、平松幸一、澤孝一郎、来住正三、住田友文、小西正捷、吉永フミ、三浦安子、濱川祥枝、内藤正、宮川松男、山田暁、茂木誠陸、飯田恵、中野工、半谷高久、東寿太郎、浮田久子、戸田盛和、慶伊富長、麻生幸、高橋浩爾、金台然、片山覚、石田貞雄、山科高康、尾田幸雄、鈴木謙三、石田孝夫、平木典子、田中国昭、三浦永光、杉山吉茂、大塩俊介、清水啓三郎、杉山好、山本澄子、飛田茂雄、合田信子、有山正孝、三戸公、三井為友、岡崎正、天野成光、隈部直光、福原満洲雄、瀬川渡、小菅敏夫、池田温、水野悦子、八木尚志、青柳総太郎、山田圭一、高橋恒郎、後藤聰一、石井素介、伊藤学、佐藤進、木村康雄、齊藤耕二、武田昌輔、渡辺忠胤、川端香男里、若山邦紘、師岡孝次、松澤正夫、大羽滋、瀬野信子、安達健、上山碩、鈴木皇、城謙輔、山口桂子、矢野正、塚本利明、杉浦銀治、清水護、川崎正三、佐々木邦彦、鈴木博、中富光國、伊藤清和、上田明子、桑原哲郎、根岸愛子、竹内啓一、武藤義夫、森山俊雄、乾崇夫、園田義道、河田敬義、深沢実、萩原玉味、石塚司農夫、田中英夫、慶谷壽信、小野寺嘉孝、大森東亜、篠崎武、小山弘志、新井明、小谷正雄、白井泰四郎、柳沢富雄、清水畏三、司馬正次、小俣武夫、石井明、青井和夫、小川洋輔、池井優、吉川孔敏、富沢賢治、松山正男、高村新一、桜井清彦、伊藤洋、上谷琢之、石川道夫、内山正熊、茅野良男、高橋昭三、原増司

松原元一、加倉井茂樹、山田辰雄、村上泰治、古田勝久、中利太郎、大頭仁、柳父園近、遠藤一郎、斎藤國治、蓮見音彦、谷重雄、岩崎代志治、小林清子、川喜田愛郎、若佐凱實、藤巻正生、板垣雄三、金子ハルオ、石井正博、鐘ヶ江信光、吉田公保、北村嘉行、山口俊夫、北原文雄、磯野修、平岡勇、中村孝之、竹林代嘉、谷資信、相原光、一丸節夫、小川政亮、吉田光孝、寺東寛治、大野京子、徳座晃子、京極純一、昌谷春海、牧野誠一、本間仁、秋間実、斎藤眞、石堂常世、勢山秀子、飯田修一、中岡二郎、手島修蔵、小野旭、板橋並治、森昭彦、藤井良治、石川信男、松島千代野、永島孝、大江正章、岡山猛、松本高志、新澤雄一、大岡信、福永壽己夫、遠藤平治、西田貴子、井原恵治、佐藤美喜子、原田敬一、箕輪成男、小泉仰、丹羽芳雄、横山実、三神勲、寺中良二、東洋、野澤辰、箱木眞澄、磯直道、猪瀬博、平川紀一、若林玄修、佐藤百世、本田和子、高橋和之、高松正昭、西川恭治 (敬称略)

◆千人会員からのたより

本年もまたお世話になりました。見知った樹々を四季折々に確かめるのも、久々に我家に戻ったようななつかしさです。

立教大学教授 小西正捷

大学教育の質が問われてひさしい中、いつももし火をかけたが続けて下さい。

立教大学カウンセラー 平木典子

ニュース『セミナー・ハウス秋号』の表紙に中央大学カールトン・セミナー参加者の写真のせていただき光栄です。'89年4月にも新参加者の研修を行います。美しい八重桜を見るのが楽しみです。

中央大学教授 飛田茂雄

二年ほどローマ日本文化会館館長として勤務いたします。二年分をお送りします。

一橋大学教授 竹内啓一

昨秋、思いがけなく文化功労者に選ばれる栄に浴しました。年金を頂くことになりましたので、今回は内祝という意味で一万円お送

ことなど到底できないのではあるまいか。私達は、時には、一つのテーマについて、世代、大学、専攻という差を超え、寝食を忘れて語り合う経験を持つことも必要なのではないだろうか。そのような体験は、ややもすると「激突」の場を作り出すかも知れない。しかし、そうした体験を持つことにより、私達は、真にわがこととしての学問を行うための最初の一步を踏み出すことが出来るのではあるまいか。

このような視点で大学生活を振り返る時、大学共同セミナーの存在は実に大きなものであった。私は前記のセミナーを

りました。

東京大学名誉教授 乾 崇夫

お蔭様で健康で米寿を迎えることができました。会費に僅かばかりを添え、喜びをお頒ちさせて頂きたいと思えます。

湯浅法律特許事務所 原 増司

毎年、新入学生の研修などでお世話になっています。朝早く、セミナー・ハウスの雑木林を歩くのが楽しみです。

武蔵工業大学教授 遠藤一郎

年金生活状況より現役になりましたので、再び送金させていただきました。

帝京大学教授 飯田修一

4月に学生課から会計課に移り、学生と接する機会が減ってしまいました。学生時代(10年前)に参加したセミナーで夜遅くまで激論を交わした学友はどうしているかと思ひながら、千人会の通知を受けました。

長岡科学技術大学職員 泉 敏彦

含め、6回のセミナーに参加したが、いずれも思い出深いセミナーであった。中でも「管理社会と身体」の特別プログラムでの様々な体験は、一生忘れられないだろう。また、多くの友人達をセミナーを通じて得たことも、私にとっては良き収穫となった。こうした「出会い」の機会を与え続けて下さる大学セミナー・ハウスの方々に対して深く感謝するものである。また、多忙にもかかわらず、私達のために御指導して下さいました数多くの先生方、そして、共に参加し、語り合った学生、社会人の皆さんに対し、心からお礼を申し上げます。

寄付金 報告

'88年12月
'89年2月

〈一般寄付金〉

- 一〇、〇〇〇円 有限会社アイワテクニカル サービス殿
- 一〇、〇〇〇円 順天堂大学医学部第8回新P3クラスセミナー殿
- 五、〇〇〇円 全国子ども劇場おやこ劇場連絡会殿
- 五〇、〇〇〇円 大学セミナー・ハウス職員丸山友一殿

〈植樹〉

- はなみずき一株 東京YWCA専門学校英語科殿
- かえて一株 日本OR学会動的計画法セミナー殿

〈教育プログラム資金〉

- 三二、六八〇円 第146回大学共同セミナー参加者殿

第70回理事会・第50回評議員会

'89年1月19日／学士会館

〔出席者〕

(理事) 中川秀恭、飯田宗一郎、三宅彰、村山松雄、吉識雅夫、小山五郎(代理)・瓦林謙司、柏木茂

(評議員) 川添利幸、喜多勲、川原栄峰、加納六郎、柳井久義、中嶋嶺雄

委任状による者 理事一三名、評議員七二名 (敬称略・順不同)

◇

理事会・評議員会は、中川理事長が議長となり、議事に入る。柏木専務理事より議案説明が逐次行なわれ、若干の質疑応答のち、各案件を承諾可決した。

▽役員人事に関する件

学長交代による法政大学長阿利莫二氏の新任、青木宗也氏の退任。茅誠司理事の死去。

▽評議員人事に関する件

学長交代による法政大学長阿利莫二氏の新任、青木宗也氏の退任。千葉大学長吉田亮氏の新任、井出源四郎氏の退任。津田塾大学長天満美智子氏の新任、大東百合子氏の退任。日本大学長中山政夫氏の新任、久木田賢志氏の退任。

◇賃金体系の運用に関する件

従来から検討されていた職能資格制度の中の評価基準を、大学セミナー・ハウ

スの業務に照らして簡素化・明確化した改善案が、給与規定の内規として正式に位置づけられた。

◇報告事項

1 大学セミナー・ハウスにおける自然環境の将来計画について
別記の常務理事会・運営委員会('88年12月8日)を参照。

2 法面部土質調査について

3 FDプログラムの開発について

別記の大学教員懇談会企画委員会('88年11月16日)及び第26回大学教員懇談会拡大運営委員会('89年1月9日)を参照。

4 利用料金の設定及び改定について

(1) 建設中の記念館の利用料金

(2) 6年間据置きのままとなっている既存施設の利用料金

常務理事会・運営委員会合同懇談会

'88年12月8日午後6時～9時
於・教師館サロン

〔出席者〕

常務理事 三宅彰、鈴木皇

運営委員 川原栄峰、岡宏子、井早康

正、山本和代

(敬称略)

特別出席 加納六郎(東京医科歯科大学学長、評議員)、青木淳一(横浜国立大学環境科学研究センター教授)、矢島稔(多摩動物園長)

法人 中川理事長、柏木専務理事

◇

'88年8月26日に開催された第69回理事会・第49回評議員会で、遠来荘北側の隣接地の盛土に関する審議が行なわれ、急速に都市化している周辺の環境に対応するためには、ハウスのキャンパス内の自然環境を計画的に整備することが必要であり、専門家の意見を聞きながら調査を行なうべきである、との具体的な提案が出された。

今回の合同委員会はこれを受けて開催されることになったものである。評議員の加納東京医科歯科大学長のご配慮により、専門家には、青木淳一、矢島稔の二氏をお招きし、別掲のような植生についての興味深いお話を伺うことができた。

なお、当日のプログラムは、①大学セミナー・ハウスにおける自然環境の将来計画、②夕食懇談会、③記念館落成記念行事の計画、④報告事項の順で進められ、①には職員7名も陪席し、研修の機会とした。

昭和63年度

第2回大学教員懇談会企画委員会

'88年11月16日／私学会館

〔出席者〕 蠟山道雄、示村悦二郎、原科

幸彦、小池生夫、絹川正吉、宮腰賢、石川孝夫、杉山恭、平木典子、坂井昭宏、

三沢佳子、中島利誠、塚田紘一、高倉翔、福田一郎、岡村浩、大谷瑞郎(敬称略)

◇

別記17名の委員に、ハウス側からは柏木専務理事、企画室スタッフ3名が出席して開催された第3回委員会は、蠟山委員長が議長となり、以下のように議事を行なった。

(1) 第25回大学教員懇談会「大学の魅力開発——動き出したサバイバル・ストラテジー」('88年10月8～9日)の実施報告

UI (University Identity) やFD (Faculty Development) に取り組んでいる大学の具体例に基づいて討議が行なわれたが、今回は運営委員会の発案で最終日に「FDプログラムの開発・実施に関するアンケート調査」を行なったことが注目される。中でも大学セミナー・ハウスで実施するとすれば、各大学での研修よりも気分の上で「参加しやすい」と回答した者が7割近くにはのぼり、懇談会としては一歩踏み込んだ形で議論ができたことは評価すべきことであろう。

(2) FDプログラムの開発と実施について

前述のアンケートの調査結果に基づいて、「FD開発センター」を構想するとすれば、大学教員懇談会の役割は極めて大きい。しかし実現のためには企画委員会との関係などの組織上の問題があり、

〈常務理事会・運営委員会合同懇談会から〉

大学セミナー・ハウスの自然環境

— その植生と保全のための提案 —

横浜国立大学環境科学センター教授

青木 淳一

植生と遷移

植生には潜在自然植生、原植生、現存植生という三つの区別がある。仮に、大学セミナー・ハウスの敷地を、人間が全く入らないままの状態を百年間放置したとしたらどうなるのだろうか。ここはシラカシを中心とした照葉樹林になるだろうと推定される。これがこの潜在自然植生である。

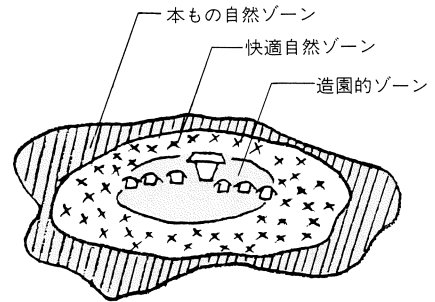
では、人間の手に加えられる前の、おそらくシカやタヌキが走り廻っていた頃の植生はどうかというと、やはりシラカシ林であった。これが原植生である。

現在存在している植生は現存植生と呼ばれるが、大学セミナー・ハウスの現存植生という、クヌギ・コナラ林であり、一部にヒノキ林、アカマツ林が見られる。クヌギ・コナラ林はわれわれが雑木林と呼んでいるものであり、人間が一度手を加え、伐採した後に生えたものである。二次林ともいわれる。原植生が本場の自然であるのに対して、雑木林は半自然の林といってもよいだろう。

植生にはこのように遷移がおこる。図式化すると、照葉樹林(シラカシ) ↓ 裸地 ↓ 二次草原(ススキ) ↓ 雑木林(クヌギ・コナラ) ↓ 照葉樹林となる。最後に辿りついた植生は、その土地の極相といい、これ以上の遷移はおこらないのである。

三つのゾーンの設定

さて、大学セミナー・ハウスの自然環境の保全を考えるに当り、以上の植生を踏まえて、私は次のような三つのゾーンの設定を提案してみた。



防波堤となる照葉樹林

まず、キャンパスのいちばん外側には「本もの自然ゾーン」を作る。これは潜在自然植生に基づいたシイ、タブ、カシの照葉樹林である。照葉樹林は極相だから、人間の手(管理)も要らないし、特定の生物が異常に繁殖することも無い。これが防波堤となつて、周辺から押し寄せてくる開発の波をくい止めることができるだろう。外から見ると、大学セミナー・ハウスはこんもりとした森に囲まれ、景観上も好ましいし、内から見ると、外界の雑多なものを遮断することができる。そのため、現在の雑木林の林床に、シイやカシなどのポット苗を植え込む方法がよいだろう。

雑木林の魅力

ところが、日本人が照葉樹林に抱くイメージは、暗い、恐れ、禁止といったもので、どうも楽しい気分にはなれない。日本人の好きな林は雑木林なのである。カサコソと落ち葉を踏んで歩く感触。葉を落とした林に差し込む明るい日の光。春にはカタクリの花が咲き、芽吹き始めの山々の美しさと新緑の鮮やかさはたとえようもなく美しい。風が吹くと薄くてやわらかい葉が揺れて木もれ日が差す夏の繁み。秋にはキノコの収穫もある。四季折々が実に楽しい。

そこで、第二に、照葉樹林の内側に「快適自然ゾーン」を設定する。これは、現存する雑木林を維持すればよい。但し現状では全くといってよいほど放つてあるので、背の高いアズマネザサがびっしりと生え込んでいるところが多い。毎年、下刈りをすれば、林の中の見通しがきいて、中を散策することができる。

動物の多様性を取り戻すために

しかし、何といっても雑木林の魅力は多様性にある。ここはコナラ二十本に対して、クヌギ一本の割合の、一五〇年ぐらいの比較的若い雑木林なので、エゴノキ、エノキ、ヤマザクラ、アカシデ、イヌシデなどを植え込んでいくと、新緑の芽吹き方や紅葉の色合いに微妙な違いが出て、趣きが増してくる。場所によっては、この中の一つを主体にした林にするのもよいだろう。谷部にはエノキとクヌギ類が、尾根にはコナラやシデ類が適している。

植物が多様になれば、そこにやってくる動物も多様になる。実は、鳥や昆虫の種類がいちばん豊かなのは、自然植生の照葉樹林ではなく、二次林である雑木林なのであり、動物の多様性を取り戻すためにも、雑木林をうまく管理していく必要がある。

快適自然ゾーンには草原も入れたい。ススキの原っぱを開放空間にして、キャンパス・ファイヤー場の周辺などに入れてはどうだろうか。

記念樹に恵まれた造園

第三に、建物の周辺、つまりキャンパスの中心部分は、「造園的ゾーン」として設定する。現状に修正を加えればよいと思われる点を、いくつか指摘しておきたい。

まず、この特色はといえば、献木(記念樹)が非常に多いことである。利用者の方々は、私の植えた木はどうなっているのだろうか、楽しみに来訪されることだろう。しかも、立札がついているので、木の名前がわかり、植物園のようにもなっている。ただ惜しむらくは、景観的にも造園的にも生態学的にも、非常に混み入っており、ごちゃごちゃしているという印象を受ける。植樹をして下さった

(12頁3段目につづく)

十分な検討が必要であろう。

(3) 第26回懇談会の企画について

運営委員を選出し、開催期日を決めるとともに、テーマについては先のFDとの絡みで、拡大運営委員会を開催して協議する。

第26回大学教員懇談会拡大運営委員会

'89年1月9日/アルカディア市ヶ谷

(出席者) 蠟山道雄、示村悦二郎、小池生夫、絹川正吉、宮腰賢、杉山恭、坂井昭宏、塚田紘一、福田一郎、岡村浩

(敬称略)

(ハウス側) 中川館長、柏木専務理事、企画室スタッフ2名



(主な議事)

(1) 第26回大学教員懇談会の企画について

(2) FDプログラムの開発について

大学教員懇談会企画委員会の中に小委員会を設け、FDに関する調査、研究を行ない、当ハウスにおけるプログラムの開発を検討すること、併せて研究助成金の可能性を探ることとする。

小委員会のメンバーは次のとおり。

示村悦二郎(早稲田大学理工学部教授)、絹川正吉(ICU教養学部教授)、福田一郎(東京女子大学文学部教授)、宮腰賢(東京学芸大学教育学部教授)、坂井昭宏(千葉大学教養部教授)

'88年12月、'89年1・2月
冬季3カ月の合宿交流から

'88から'89への「越年」、そして程なくして到来した昭和から平成への「時代の区切り」。しかし、雑木林が葉を落とす12月から、立春が過ぎて春の芽吹きが始まる2月——この丘の季節の表情はいつもと変わりはなく、また、寒気にめげず合宿研修に打ち込む人びとの熱心な表情も年々歳々変わることはない。冬季3カ月の共同生活・共同学習の中からいくつかの話題を拾ってお届けしたい。



20周年を祝った東京神学大学主催の「教職セミナー」
(*89.1.12. 交友館前庭)

●22年間の冬合宿を締めくくる

12月のハウスは「冬季休暇」の常連合宿の再来で賑わう。うち、仕事納めの28日まで滞在してハウスの'88年を締めくくってくれたのは4グループ（杉野女子大、東京学芸大A I T C、日本学生経済ゼミナール、文学教育研究者集団）と個人利用2名（白梅学園短大議長・田中未来、ICU学生・渡辺一正両氏）の計11名であった。

田村皖司・杉野女子大学教授はこの年末も7泊8日で「教育原理ゼミ」の合宿を実施された。30名（教師4名・学生26名）全員が今回もハードな全行程を「完走」し、なし遂げたあとの、あのいつものさわやかな笑顔を残してこの丘を下りた。12月28日、毎年見られる光景である。が、'88年のこの日は、田村教授にとつては特別に感慨深い「仕事納め」であった。22年間続けてこられた、この冬合宿をついに「完走」しきった日でもあった。この合宿を最後に、今後その指導を、既定方針どおり、後進にゆずられることになったからである。

田村教授による初めての合宿は'67年、ハウスが開館して二年目の春。以来春・夏・冬の年3回（後年は2回）の各休暇に7泊8日のセミナーを実施された。長期セミナー館が建設されてからは一貫してそこを本拠とされ、同館の「個室・合宿併用」の機能を最大限に活かしての「自立と共同」の学習生活を展開してこられたことが大きな特徴である。しかし、

（11頁より）
方々のことを考えると、みだりにあちこち動かすことはできない。

そこで、献木の移動は極力さけることにし、まわりの樹木を除去してすっきりさせ、出来ればそこを芝生にしたい。さらに立札の白さが目障りなので、地色を変えたり、表記方法も番号にするなど、工夫すると、一層、すっきりした感じになるだろう。

緑のグラウンド・カバール

次にユニット・ハウスの周辺や講堂の裏の赤土が、むき出しになっているのが気になる場所である。工事のキズ跡がそのまま残っている、という印象を与えるので、緑のグラ

私の国際交流

大学セミナー・ハウス再訪

—矢澤教授のゼミ合宿に参加して—

専修大学商学部3年 趙 慧宏



矢澤教授と趙さん (*88.12.18)

7年前にわたくしは日中文化交流事業の一つである中国人日本語教師団に加わり、一ヵ月間程日本に滞在しました。その時は日本の各地を廻り、素敵なホテルにも泊まり、いろいろな人と出会いました。誰もが親切で、日本の素晴らしさを満喫しま

ンド・カバールを施したい。ベニシダ、イタチシダ、ゼンマイなどの羊歯類やジャノヒゲ、シヤガ等の日陰に強い草本が好ましい。羊歯は買うことができないので、山から採取するのがよい。もしも、工事で壊されてしまう山が近くにあれば、人間に救急医療があるように、植物の応急処置の意味で、羊歯をそっくり大学セミナー・ハウスにいただけたいだろうか。因みに造園のゾーンは、美、調和、安全、清浄、変化というイメージを念頭において設計されるとよいだろう。

（文責・編集者）

した。中でも印象に残ったのは大学セミナー・ハウスでの滞在でした。

緑の多い落ち着いた環境の中で楽しく有意義な8日間を過ごし、館長さんをはじめ、ハウスの皆さんの温かい心に触れる事ができました。交歓会、観賞会等催し物も多彩なプログラムを組んでいただき、深く感銘を受けました。うしろ髪を引かれる思いで帰国しましたが、再び7年経った今、ハウスを訪れる事ができて、懐かしい思い出が脳裏に浮んできました。セミナー・ハウスのユニークな建物、絵のような自然に恵まれた景色、スタッフの皆さんの親切さ等とても感激しました。

今回は教師としてでなく、専修大学商学部の3年生として、矢澤秀雄先生のゼミ（近代管理会計）の合宿で、進級及び卒業論文の指導をしていただきました。わたしは「中国と日本の原価管理の比較研究」を発表し、先生の指導のもとで、両国の原価管理の方法の異同について、仲間と討論し合い、いっそう理解を深めました。大学では得られない大家族のような睦ましい雰囲気の中で、充実した研究発表の3日間を過ごしました。以前とは違った感激にひたり、このハウスの持つ意義を深く心に刻み、これからの日中文化を通しての交流に何か一つでも役に立つ事ができれば光栄です。

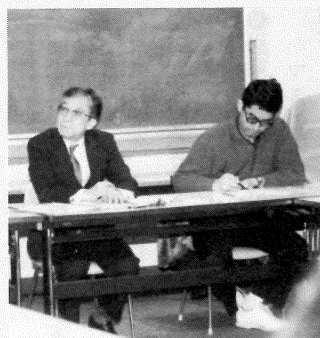
そして、この大学セミナー・ハウスに三たび訪れることができるのを楽しみにしております。

長期セミナー館における 22年間の学び

杉野女子大学教授 田村 皖司

大学セミナー・ハウスの長期セミナー館における7泊8日の学部「教育原理」教育の合宿は、昭和63年12月28日、22年間の小さな歴史の幕を閉じた。

この合宿は、1年次後期の「互いに語り合う」授業にはじまり、2年次前期の『ソクラテスの弁明』を教材とした15週の演習を経て、夏休みにJ・デューイ『民主主義と教育』の完読と第一論文の作成・提出、さらに個人面接・プレ合宿・研究発表要旨集の作成につづく、「教育原理」教育の総括の位置を占めるものである。



最終セッション「合宿をふりかえって」で学生の感想を耳に傾ける田村教授(左) ('88.12.28)

学生はこの8日間『民主主義と教育』を単独にあるいはグループで研究しつづけ、研究発表・討論・批判を受け、8日目の午前7時から8時までの間に最終論文を提出する。さらにこの期間毎日4・1キロのマラソンが入る。そして教師主導の研究発表とそのコメントを除けば、合宿のすべては学生の自主運営・自主管理のもとにすすめられていく。

2泊3日の合宿であれば、学生も教師も大学における教室の延長線上でこれを楽しめることができる。しかし7泊8日では、このようなテーマは最早通用しない。教室では決して現出しえないような限界状況、さまざまな葛藤、争い、苦悩、対立が苦しい学びの中の個人の内部、あるいは集団の人間関係の中につきつきと発生する。教師と学生との関係も例外ではない。ここではひとりひとりが自らの力でこの問題場面を一つ一つ丹念に克服していかなければならない。さもなければこの合宿の形式は崩壊し終焉し、翌年の合宿は行われない。

他大学の院生4名を迎えて成立した指導者集団が学生との対応をめぐって真つ二つに割れ、激論をたたかかせ夜を明かしてしまったこと。学生と教師集団が真正面から対立したままお互いに軽蔑し合いながら、しかしそれだけに心に深く傷を残し、八王子の駅で別々の車両のドアをくぐったこと。学生の完全な自主運営のもとで展開された昭和61年の合宿では、民主的な運営のあり方をめぐって50名余の全員が午前2時まで5時間の討議に死力をつくしたこと。

しかし、それにもかかわらず、いや、それだからこそこの合宿は22年間生きつ

それよりも何よりも注目すべきことは、7泊8日の教師と学生、さらに学生同士の、集中的な「共同探求活動」とその自主運営のプロセスのすべてが、「合宿」において到達可能な「限界状況」へのためみない試みであり、挑戦であったことであろう。

本号の『わたしたちの合宿』（上掲）では、田村教授から22年間の「八王子合宿」の体験の一端をお分かちいただいた。なお、田村教授ほかこれまで同合宿に参加し、指導にあたってこられた4氏による研究報告『八王子合宿』教育実践の意義——教師教育における「教育原理」教育のあり方を求めて——が同大学の『紀要』第25号（88年12月）に一六八頁にわたって紹介されている。

づけてきたのである。ここには常に精一杯努力する学生の姿の美しさ、友だち同士の励まし合いによる友情の発見、学生の研究発表や思考の展開に感動し語り合う教師集団のよるこび、これらすべてが22年間を支えてきた原動力であった。

勿論、独自の教育的構造をもった長期セミナー館の存在、およびつねにこの合宿を温かい目でみつめ惜しみなく援助を下さった職員の方々の存在を忘れることはできない。

●さまざまな国際交流

専修大学商学部の矢澤秀雄教授が、12月中旬、ゼミの学生27名とともに合宿をされた。同教授としては10年ぶりの再来となったが、そのきっかけを作ったのは中国からの留学生・趙慧宏さんであった。趙さんは7年前に外務省の招待で来日した中国人日本語教師団（20名）の一人。一行はハウスに8日間滞在したが、趙さんはその時ここで体験した交流の喜びを忘れることができなかった。そしてそれから4年後、こんどは一留学生として再び来日。以来、ハウス「再見」を願っていたが、ゼミ合宿の八王子開催を働きかけ、念願のハウス再訪を果たした。後日寄せられた感想（12頁）をご紹介します。

このほか、ハウスはさまざまな国際交流のための場を提供することができた。明星大学の「日中学术交流会」で、中国ハルビン師範・黒龍江両大学の教師2名・学生10名が国際セミナー館に12泊した。恒例の慶応大学小池インターナショナルゼミでは日米の学生が両国の教育や経済摩擦などについて討議した。日本パキスタン協会のシンポジウム「音楽と詩」には、駐日公使一家らパキスタン人10数名も来館、夜のセミナー室での民族音楽演奏などで交歓した（14頁写真）。日本山岳協会の海外登山技術研究会ではカザフ共和国からのロシア人3名が、お国の山々をスライドで紹介した。また、国際交流基金のフェローとして来日したタン



日本パキスタン協会のシンポジウム「音楽と詩」
(大学院セミナー館 '88.12.3)

Inter-University Seminar House

an important point of beginning life in Japan



夕食時の交歓会でタンザニア紹介のスピーチをするサヨレ氏 ('88.12.1)

December '88

As a stranger in a country I am visiting for the first time, coupled with a major handicap of communication due to language barrier, I found my stay at the Seminar House an important point of beginning my eight month stay in Japan.

The officials and staff of the Seminar House have an unrivalled understanding and forbearance for the persons of different background and culture they meet and serve everyday. The surroundings are uniquely designed to cater for persons from all walks of life. The facilities are most ideal for serious conferences and seminars.

All foreign students and researchers ought to spend their first week or two at the Seminar House.

Simon F. Sayore
Director General
Tanzania Audit Cooperation
(Japan Foundation Research Fellow)

ザニアのサイモン・サヨレ氏(会計検査公団総裁)は、一橋大学で日本の企業・経営についての研究に入るまでの12日間ハウスに滞在、在泊者との交流を楽しんだ(別掲感想文を参照)。

●厳寒1月の合宿研修

ハウスの新年仕事始めは1月5日。早々に文教大学女子短大部の50~107名が「海外交流オリエンテーション」(ニュージールランド、アメリカ出発前の英語研修)で計3泊。その週末には、常連のP-450研究会、東京都立大学二村敏子ゼミの2グループ20名が加わった。

大学の試験期間に入る1月はハウスの閑散期であるが、それでも今年は延べ二千人を超える宿泊利用者を記録した。例

年に比べて千人前後多い。新春の常連ハウスでの開催「20周年」を祝った東京神学大学「教職セミナー」(90名・2泊)(12頁写真)、8年目の順天堂大学医学部「新P3クラスセミナー」(136名)、10年目の高階秀爾教授らの東京大学美術史研究室(28名・2泊)など——の再来。そして同月中旬には、184名が4泊(延べ750名)という全国的研究集会——全国子ども劇場おやこ劇場連絡会「第1回全国劇場事務局学校」(下掲写真)——の初利用を迎えることができたからである。

●交歓の集い点描

冬合宿は卒業を間近にひかえた学生諸氏にとつては大学生活最後の来泊。教・師・学友との交流を一層深める機会であ

る。ハウスも恒例の季節の行事などで、いくつか交歓の場を設けた。

年末の餅つきには8グループ145名が参加し、「成人の日」前夜の夕食時(6グループ230名)には、この丘でその日を迎えた「新成人」45名に祝意を表明、ハウス運営委員の木村尚三郎・東京大学教授からメッセージが、ハウスからはささやかな記念品が贈られた。また、前記タンザニアのサイモン・サヨレ氏は滞在中、交歓会でお国紹介のスピーチをされた(写真)。

遠来荘での月例茶道教室も2月に再開し、7グループからの20名が交流する心温まる「初釜」となった。今年も地元二つの奉仕グループのご協力により、原則として第4日曜日の午後開催される。



新春1月最大の合宿集会となった「第1回全国劇場事務局学校」(全国子ども劇場おやこ劇場連絡会)——全国から184名が参集して4泊(講堂での開校式 '89.1.18)

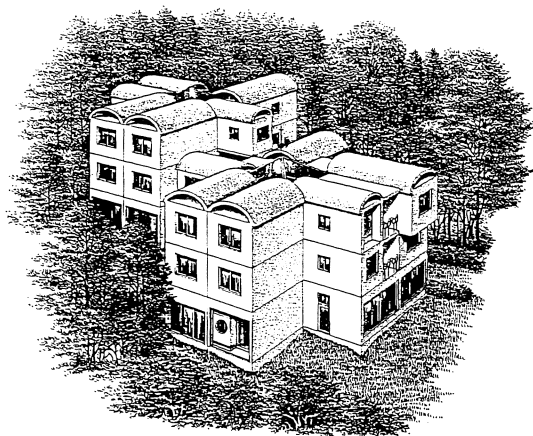
研究者の国際交流を目的とした

開館20周年記念館

International Lodge

7月にオープン

予約を受け付けています



■宿泊室（収容定員40人）

- シングル 6室
- ツイン 16室
- 和室 1室

◎一部シャワー・トイレ付

- セミナー室（ラウンジ兼用、パントリー付）
- A室 15〜20人用
- B室 20〜30人用

■付帯施設

瞑想室（茶室兼用）、浴室（2）

シャワー室、洗濯室

■宿泊料（一泊につき）

大学教員 三、五〇〇円から

■利用料金の改訂について

利用者の皆様のご負担をできるだけ軽く、との基本方針にもとづき、当ハウスはここ6年間にわたって利用料金を据え置いてまいりましたが、このたび新年度4月1日以降の料金を左のとおり改訂させていただくことになりました。今回は、本年7月にオープンする開館20周年記念館（International Lodge）の料金改訂にもなう、「宿泊料」全般の調整を主眼とする最小範囲内の改訂にとどめ、「研修室使用料」と「食事代」は引き続き据え置きとしました。ご理解とご協力のほどお願い申し上げます。

なお、4月1日以降のご利用については、宿泊料、研修室使用料、備品貸出料、食事代などに消費税3%分が別途加算されることとなりますので、ご了承下さい。

■ユニットハウスの宿泊料（一泊につき）

- 学生（会員校） 一、九〇〇円
- 学生（非会員校） 二、二〇〇円
- 教師（会員校） 二、四〇〇円
- 教師（非会員校） 二、八〇〇円

利用状況

●12月(92グループ、延三、四九八人)
 国際基督教大学教授* 都留 春夫
 東京都立大学教授 峯岸賢太郎
 中央大学教授 下村 康正
 東京電機大学教授 八木澤壮一
 学習院大学講師 小島 麗逸
 東京都立大学教授 国井 隆弘
 東京都立川短大教授 伊藤 セツ
 電気通信大学教授 萩原洋太郎
 東京都立大学助教授 柳田 辰雄
 慶応義塾大学教授 小池 生夫
 駒沢大学教授 洪谷 隆一
 中央大学教授 木島 淑孝
 一橋大学助教授 榎原 清則
 早稲田大学助教授* 鴨 武彦
 横浜国立大学助教授 福田 幸男
 明星大学日中学术交流会 中村剛治郎
 青山学院大学教授 佐藤 和男
 恵泉女学園短期大学英文学科総合講座「国際」セミナー 山川 仁
 東京都立大学講師 吉田 恒雄
 明星大学助教授 高橋 史朗
 成蹊大学講師 別枝 行夫
 明治大学教授 長尾 史郎
 武蔵大学教授 村田 晴夫
 東京理科大学教授 狩野 紀昭
 東京大学教授 坂部 恵
 東京都立大学教授 山住 正巳
 慶応義塾大学助教授 川原 榮峰
 早稲田大学教授 国分 良成
 早稲田大学教授 染谷恭次郎
 中央大学教授 五井 一雄
 東京外国語大学教授 若林 俊輔
 早稲田大学教授 平澤 茂一
 早稲田大学教授 大頭 仁
 早稲田大学助手 片山 覚
 東京都立大学助手 青塚 正志
 東京都立大学教授 戸張よし子

東京都立大学教授	長浜 邦雄
東京外国語大学教授	原 誠
東京外国語大学リीडァーシップトレーニング	
中央大学教授	渡部 裕巨
東京経済大学教授	竹前 栄治
中央大学助教授	千葉 洋
早稲田大学助教授	米田 貢
日本女子大学教授	大石 進一
青山学院大学教授	杉溪 一言
日本大学教授	速水佑次郎
駒沢大学講師	菊池 敏夫
東京学芸大学助教授	渡辺 裕子
杉野女子大学教授	金谷 憲
東京YWCA専門学校英語科	田村 皖司
国士館大学建築学科意匠ゼミナール	
神奈川大学教授	野沢 浩
専修大学教授	矢澤 秀雄
立正大学教授	厚東 偉介
第9回社会学会合同セミナー	
四大学合同セミナー	
第146回大学共同セミナー	
国際学生シエイクスピア連合	
日本学生経済ゼミナール東京部会	
日本OR学会	
日本人子どもの本学会	
光化学討論会インフォーマルミーティング	
日本パキスタン協会	
東京多摩いのちの電話	
文学教育研究者集団	
六工社	
山村硝子**	
安川電機製作所	
ヒューマンライフセンター	
酒井薬品	
日野協力会	
日本分光工業	
コニカ	
日本システム開発	
オリエント時計労働組合	
ブリヂストン	
(個人利用)	
国際基督教大学学生*	渡辺 一正
愛三工業	間瀬伊佐夫
和光化成工業	谷澤 清

予 告

●開館20周年記念館(インターナショナル・ロジ)落成記念シンポジウム

主題：現代における大学の役割
—日本の大学は国際化に耐えうるか—
期日：1989年7月7日～8日(金～土)

◇記念講演
学問の国際化とは何か
シカゴ大学教授 入江 昭氏

◇シンポジウム
I. 若い研究者の国際交流—日本学術
振興会のプロジェクトから—
東京大学名誉教授・東京理科大学教授
植村泰忠氏
II. 一神と多神—国際化の教義と科学—
東京工業大学大学院総合理工学研究科長
市川惇信氏

III. 文化開国時代の大学と学問
東京大学文学部教授 坂部 恵氏
IV. 日本における大学院教育と国際化
東京都立大学法学部教授 岡部達味氏

[運営委員]
(委員長) 上智大学教授 蠟山道雄氏
東京大学教授 竹内 啓氏
上智大学教授 三輪公忠氏
学習院大学教授 江沢 洋氏
早稲田大学教授 示村悦二郎氏
東京外国語大学教授 宇佐美滋氏
東京工業大学教授 熊田禎宣氏
千葉大学教授 坂井昭宏氏

参加対象 大学教員・研究者 40名

◎7月8日午後1時に記念講演・落成式・記念パーティーが行われます。一般の参加を歓迎いたします。

●第16回国際学生セミナー

主題 〈開かれた)日本・総点検
—21世紀の世界と日本—
期日 1989年10月27日～29日(金～日)

◇ゲスト講演
日本にグローバル・ストラテジーはあるか(仮題)
内外政策研究会会長 大来佐武郎氏

◇セクション演習
A. ODA と日本の外交戦略(仮題)
外務省経済協力局長 松浦晃一郎氏
テンプル大学助教授 R・オーア氏
B. 日本の対社会主義外交の課題(仮題)
静岡県立大学国際関係学部教授
毛里和子氏
筑波大学社会科学系助教授 秋野 豊氏
C. 世界経済のブロック化と日本の役割
成蹊大学経済学部教授 広野良吉氏
明治学院大学国際学部助教授
山根裕子氏
D. 日本は本当に豊かか(仮題)
早稲田大学政治経済学部教授
内田 満氏

◇問い合わせ先=企画室☎0426-76-8532(直通)

- 豊田鉄工 深津 政広
- 国際交流基金フェロー サイモン・F・サヨレ
- 中京大学教授 野原 敏雄
- 白梅学園短期大学学長 田中 未栄
- 1月(45グループ、延二、二二一人)
- 文教大学女子短期大学海外交流オリ
- エンターション*
- 東京都立大学教授 二村 敏子
- 東京都立大学教授 稲垣 寛
- 一橋大学教授 田内 幸一
- 順天堂大学医学部新P3クラスセミ
- ナ
- 東京大学教授 木村尚三郎
- 東海大学教授 師岡 孝次
- 東京理科大学教授 狩野 紀昭
- 工学院大学電子工学科教職員会議
- 早稲田大学教授 徳久 球雄
- 東京都立大学助教授 日向野幹也
- 東京都立大学助教授 徳田 忠彦
- 白梅学園短期大学教授 民秋 言
- 東京外国語大学助教授 田島 信元
- 東京大学教授 高階 秀爾
- 東京都立大学助教授 森岡 清志
- 法政大学教授 城戸 朋子
- 法政大学講師 坂井 博通
- 東京神学大学第20回教職セミナー
- 玉川大学カウンセリング研究会
- P150研究会
- 全国子ども劇場おやこ劇場連絡会
- 平塚製パン
- 六工社
- 積水化学工業
- 東亜新薬
- EYE
- アイワールド*
- 雪印物産
- 多摩中央信用金庫**
- 大地住販
- 酒井薬品
- 忠実屋
- 国際交流サービス協会
- 鳥津製作所
- コニカ
- (個人利用)
- V研究会*
- 中国人留学生
- 失部事務所
- 2月(92グループ、延三、二七一人)
- 駒沢大学教授*
- 青山学院大学助教授
- 東京女子大学教授 二宮 良二
- 早稲田大学講師 長内 了
- 明治学院大学サークル連合会文化団
- 体委員会
- 明治学院大学人形劇団ZOO
- 武蔵工業大学学生団体連合会リ
- グース・キャンプ**
- 中央大学講師 新井 裕
- 津田塾大学助手 菅原 淳子
- 東京電機大学リीडグーズ・キャン
- 早稲田大学国際学生友好会
- 青山学院大学教授 寺東 寛治
- 早稲田大学教授 鈴木 慎一
- 慶応義塾大学ワグネル・ソサイエ
- ティ男声合唱団
- 明治大学講師 竹下 譲
- 早稲田大学生活協同組合
- 日本大学教授 遠藤 邦彦
- 武蔵工業大学教授 広瀬 謙二
- 明治大学教授 牧野 誠一
- 青山学院大学教授 増田 実
- 武蔵大学美術部
- 中央大学講師 山口 英幸
- 帝京大学講師 堀井 啓幸
- 東京都立大学教授 金澤 孝文
- 武蔵大学体育連合会リीडグース・
- キャン
- 帝京大学書道部
- 早稲田大学名誉教授 新澤 雄一
- 東京大学名誉教授 朽津 耕三
- 東海大学教授 綾野 克俊
- 明星大学教授 鈴木 二郎
- 法政大学全音楽楽団体協議会グル
- プ・リीडグーズ・キャン
- 東京都立大学助教授 鳴沢 実
- 一橋大学助教授 坂内 徳明
- 立教大学教授 中野 光
- 上智大学シエイクスピア・プロダク
- ション
- 東京理科大学助教授 川端 潔
- 東京理科大学教授 狩野 紀昭
- 工学院大学助教授 加藤 尚武
- 早稲田大学助教授 大槻 義彦
- 東京経済大学文化会
- 慶応義塾大学英語会
- 亜細亜大学助教授 嶋津 格
- 玉川大学教授 若槻 泰雄
- 女子聖学院短期大学宗教センター
- 中央大学教授 小林幸一郎
- 東京YWCA専門学校秘書養成科
- W・I・T・T
- 日本学生経済ゼミナール
- 私大問題セミナー
- 日本建築学会
- 府中パブテスト教会
- 日本伝道者協力会
- 「日本とロシア」研究会
- 都高教7支部青年部
- 日本山岳協会
- 雪印物産 東芝
- エイ・ジイ・アイ・ジャパン
- クオレ西関東販売
- 下井
- 日本電気
- シボレックス製造
- ヒューマンライフセンター
- アイワールド*
- パーソンズ
- セキド
- 日本生産性本部
- エックス都市研究所
- オリエント時計労働組合
- 日電アネルバ
- 酒井薬品
- 日本エル・シー・エー
- 中野輸送
- 三和銀行
- (個人利用)
- V研究会*
- 東京ホールセール 吉本 昌司
- 丸山 敏夫
- 東洋大学教授 堀 光男
- 丸正 木村 和昭
- 小倉 用治
- 安田精工

●編集後記●

表紙の写真は、杉野女子大学の田村院司教授が、'67年から22年間に亘ってつづけてこられた「教育原理ゼミ」の最終合宿における記念撮影である。花束を手にされた同教授の、心なしかテレた表情の奥に、22年間の人間ドラマの数々が去来したであろうことは、想像にかたくない。大学教育の担い手が、その人生の主要な活動期に精魂をこめて実践された行動の証しとして、『わたしたちの合宿』(13頁)は感動的である。後進に冬合宿を譲り、新しい形の実験をスタートされるという、田村教授の「熟年期」に、心からの拍手をおくりたい。(能)

「セミナー・ハウス」一九八九年四月二十五日号 発行 財団法人大学セミナー・ハウス 千一九二〇三 東京都八王子市下柚木 〇四二六七六八五一 振替口座 東京五七四五九〇番 編集 大学セミナー・ハウス企画室 編集・発行人 中川秀泰 製作 中央公論事業出版